

Mahākarmavibhaṅga 所引の 經・律について

並 川 孝 儀

1

1922年ネパールより発見された梵文写本 *Mahākarmavibhaṅga* (MKV) は 1932年 S. Lévi によってその註釈書 *Karmavibhaṅgopadeśa* と共に、そして更に MKV と同系の一連の資料、即ち2種の漢訳『仏為首迦長者説業報差別經』、『分別善惡報應經』と Tib 訳 *Karmavibhaṅga* (*Las rnam par 'byed pa*)、中央アジア出土梵文断片 *Śukasūtra*, *Majjhima Nikāya* 所収の *Cālakammavibhaṅgasutta* とその註釈、クッチャ語 *Karmavibhaṅga* の断片が所収され、博士の厳密な文献学に基づいた研究と共に出版された。MKV と同系の經典には他に2種の漢訳と1種の Tib 訳が存在する。

求那跋陀羅訳『仏説鸚鵡經』(大正1・888b-891a)

失訳『仏説兜調經』(大正1・887b-888b)

Karmavibhaṅga nāma dharmagrantha (*Las kyi rnam par gyur ba zes bya ba'i chos kyi gzuñ*)^② (TTP. vol. 39 126-3-3~131-1-7)

これら同系の經典群も成立史的考察によって2類に大別できる。より初期的形態を有するものとして *Cālakammavibhaṅgasutta*, 『中阿含經』(170)「鸚鵡經」, 『仏説兜調經』, 『仏説鸚鵡經』であり、これらより展開したと考え得るものとしては MKV, 2種の Tib 訳 *Karmavibhaṅga*, *Karmavibhaṅga nāma dharmagrantha*, 2種の漢訳『仏為首迦長者説業報差別經』, 『分別善惡報應經』とである。これら一連の經典は在家者に対する業報思想を説くが、それは

業報の差別を主題として、前半部は導入部としての因縁談、後半部は何種類にも亘る業報分別の類型といった形式より成り立っている。上述した2種の分類はこの後半部の類型数を基準とした、即ち前者は業報分別を14に分類しているのに対し、後者は70種以上にものぼる点から考察される。MKVは後者に属するが、それに属する經典群も各々分類数に多少の変化が見られ、又業報分別を行なう際、そこに因縁談が記されている經典、漢訳2本の如くそうでない經典といった具合にその他小さな相違点も含めて異なっている。本論ではこれらの比較研究を目的とはしていない為、それは別稿に譲るとしても、少なくともMKVはTib訳2本、漢訳2本とも異なっており、その相違点を単に成立史的に考察するのみならず、部派的理解によって研究されなければならないことも事実である。

部派の所属問題を論じる時、種々の方法は存在するが、文献中に引用される經典等が存在する場合、それらを吟味する方法も一つの意義を有する。事実、MKVには多数の經典及び律等が引用されており、先ずこれらと関連資料等との比較研究によって所引經典等が經典史上如何に位置付けられるかを定立しなければならない。この考察の結果は自からそれらを所引するMKVの所属部派の輪郭を現わしてくれることに他ならない。

ここでMKVにおいて26回に亘り、20種にのぼる所引經典等を以下に列挙する。^④

(1) sūtra

Kālikasūtra	(p. 33)
Nandikasūtra	3 回 (p. 33, 42, 44)
Bakapratyekabrahmasūtra	(pp. 34-35)
Pūrvāparāntakasūtra	2 回 (pp. 39-40, p. 67)
Śākyasūtra	(p. 42)
Karmavibhaṅgasūtra	(pp. 46-47)
Śrāmaṇyaphalasūtra	(pp. 49-50)
Dhanañjayasūtra	(pp. 55-56)

Śivālakasūtra	(p. 56)
Cakravartisūtra ^⑤	(pp. 59-60)
(Abhidharma cakravartisūtra) ^⑤	2 回 (p. 94, 103)
Dakṣiṇāvibhaṅgasūtra	(p. 61)
Rājopakīrṇaka	(pp. 70-71)
Devatāsūtra ^⑤	2 回 (p. 89, 94)
(2) jātaḥ	
Simhajātaka	(p. 44)
Śyāmākajātaka	(p. 50)
Śyāmajātaka	2 回 (p. 55, 56)
(3) その他	
Saptasūryopadeśa	(pp. 36-37)
(Abhidharma) Cakravartisūtravibhaṅga ^⑤	(p. 102)
Mahīśāsaka vinaya	(p. 60)

これらの中、取意して紹介する場合、又実際に原文を引用する場合もあるが、上記以外で經典名を明記しないで引用する場合も多々見られる。

本論では所引される經典等すべてを記述し得ないので、これらの中、上記の主要な 5 經、律、そして經典名が明記されていない引用文を 2 種取り上げて吟味を試みるものである。

2

MKV 所引の律は 3 例見い出せるが、その中 2 例は単に *vinaye* と出典が明記されないで引用されている。以下順次に 3 例各々を考察する。

[1] mahīśāsakā gotrāntariyā vinaye

先ず出典が明記されている 1 例を示す。これは外国で果報を受ける業は何であるのかという業の分類の因縁談で、家住期の人々は父母と出家者に供養し、出家者は阿闍梨と和尚に供養しなければならないという段で引用されている。即ち、

yathā *Mahīśāsakā gotrāntariyā Vinaye* ‘rthotpattiṃ dhārayanti.
yathāha Bhagavān. na bhikṣavaḥ ācāryopādhyāyān anāpṛṣṭvā deśān-
taraṃ gantavyam. kasmād. bhavati bhikṣavo jīvitāntarāyo bhavati
brahmacaryāntarāyo bhavati pātracīvarāntarāyaḥ. bhūtapūrvam bhik-
ṣavo Maitrāyañño nāma sārthavāhaputra āsīd iti. (p. 60)

ここで *Mahīśāsakā gotrāntariyā Vinaye* は2つの意味を提示している。一つは *Mahīśāsakā Vinaye* とある故、化地部の律、即ち『五分律』を意味しているという点、他は *gotrāntariyā* 「異なった部派である」が *Mahīśāsakā* と同格で *Vinaye* を修飾しており、「異なった部派である化地部の律に」という意味になるが、ここで、この *gotrāntariyā* なる語は部派所属の問題に一つの明確な態度を表明している。「異なった部派である化地部」とは化地部以外の部派を明示していることに他ならず、それ故これは所引している MKV が化地部とは異なった部派に所属している資料として位置付けられなければならない。この引用文が収められていると思われる現存漢訳『五分律』における該当箇所を調査したが遺憾ながら見出し得ない。このことは如何なる理由であるかは種々の推測は可能としても不明である。『仏為首迦長者説業報差別經』や Tib 訳 *Karmavibhaṅga* 等にはこの引用文の対応箇所が存在しないので確めることも出来ない。

律の引用文は他に2例見られるが、この場合、上記の如くには出典名は明記されていない。この2例は上記の直前に1例が、他の1例はそれ以後に記述されている。出典名が明記されていないということは如何に理解されるべきであろうか。結論的に言えば、それは MKV 所属の律を指示しているものと解し得る。何故なら、化地部の律より前に引用され、出典名が明記されていないということ、そしてこの2例の律が他部派所属のものとするならば、律のように部派性の色彩が強いことを考える時、化地部同様部派名を明記するであろうからである。この前提のもとに2例を以下で吟味する。

[2] *vinaye*

父母と子の関係、そして阿闍梨・和尚と弟子との関係は如何にあるべきかを

説く段で引用される。

yathā Bhagavatā Vinaya uktam.

upādhyāyasya śiṣye putrasaṃjñā bhavati. śiṣyasyāpy upādhyāye pitṛsaṃjñā bhavati. evam anyonyaniśritāḥ sukhino bhaviṣyanti. (p. 59)

諸律からこの引用文の該当個所を示せば以下の如くである。

Vinaya Piṭaka

ācariyo bhikkhave antevāsikamhi puttacittam upaṭṭhāpessati, antevāsiko ācariyamhi pitucittam upaṭṭhāpessati, evaṃ te aññamaññaṃ sagāravā sappatissā sabhāgavuttino viharantā imasmiṃ dhammavinaye vuddhiṃ virūḷhiṃ vepullaṃ āpajjissanti. (Vinaya Piṭaka vol. I p. 60)

『四分律』

世尊言。自今已去聽有_二和尚_一。和尚看_二弟子_一。当_下如_二兒意_一看_上。弟子看_二和尚_一。当_下如_二父意_一。展轉相敬。重相瞻視_上。如_レ是正法便得_二久住_一。長益广大。(大正22・799c)

『五分律』

聽諸比丘有和尚。和尚自然生心愛念弟子如兒。弟子自然生心敬重和尚如父。勤相教誡更相敬難。則能增廣佛法使得久住。(大正22・110c)

『十誦律』

從今諸有和尚阿闍梨。看共住弟子近住弟子。養畜如兒想。共住弟子近住弟子。看和尚阿闍梨如父想。汝等如是展轉相依住。於我法中增長善法。(大正23・148b)

『摩訶僧祇律』と『根本有部毘奈耶』には該当個所は見い出せない。この引用文を上掲した如くに MKV 所属の律との前提に立つならば、先ず化地部の『五分律』、MKV が北方所伝であることより南方上座部所属の *Vinaya Piṭaka*、そして該当個所が見い出されない大衆部系の『摩訶增祇律』と根本有部所伝の『根本有部毘奈耶』はこの引用文の指示する文献でないことになる。即ち、この引用文は法蔵部所伝の『四分律』と説一切有部所属の『十誦律』と対応することとなる。『四分律』と『十誦律』とを厳密に比較すると、例えば前者が和尚、後者が和尚・阿闍梨との若干の相違があり、この引用文はどちらかと言えば前者と一致するが、このような差異は訳出上の要素も十分に考慮に入れなければならず、決定し難いと考えの方が妥当であろう。いずれにしても、この引用

文からは『四分律』か『十誦律』かが指示されているものと考えられよう。尚、この引用文は Tib 訳 *Karmavibhaṅga* にも所引されているが、そこでは *evam anyonyanīśritāḥ sukhino bhaviṣyanti* の部分は記されていない。

[3] vinaye

続いて他の1例であるが、これは原文引用ではなく「シェラーヴェスティーの識師の因縁談が述べられている」と紹介されているに止まっている。諸律を眺めると、例えば『四分律』^⑨ 卷9、『五分律』^⑩ 卷4、『十誦律』^⑪ 卷8、『摩訶僧祇律』^⑫ 卷11、『根本有部毘奈耶』^⑬ 卷22等の如くにすべての律において識師の因縁談が説示されており、各々に若干の相違点は存在するものの、この引用文からはどの律の因縁談を指しているかは不明である。

以上、律に関する例を見たが、これより MKV の所属部派は化地部でないことは確実であり、そして不確実の要素は残るが法蔵部か説一切有部ではないかといった見解が提示される。但し、今日現存はしていないが、可能性として広律を具えていたと考えられる飲光部、正量部等も考慮に入れる必要があるかも知れない。

3

ここでは經典名が明記された引用文を5例取り上げて以下で吟味する。

[1] *Karmavibhaṅgasūtra*

yathā coktam *Bhagavatā Śatavarge Āgame Karmavibhaṅgasūtre.*

tasya khalu punar Ānanda pudgalasyānyajātikṛtaṁ vā karma pratyupasthitam bhavati. maraṇakāle vā mithyādrṣṭiḥ. (pp. 46-47)

これはヤマの世界に生じさせる業とは何であるのかを説く段で引用される。この引用文は Tib 訳 *Karmavibhaṅga* にも見い出せるが、そこでは經典名は明示されておらず、ただ100巻本の經典に (brgya bsdus pa'i mdo las) と述べられているに過ぎない。

bcom ldan 'das kyis kun dga' bo la bka' stsal pa. kun dga' bo gañ zag la la tshe rabs sñā ma la byas pa'i las ñe bar gnas par gyur tam. tshe 'pho ba'i

tshe log par lta bar gyur pa bstan no (TTP. vol. 39 118-5-4~5)

(訳) 実に又アーナンダよ、この人が他の世において為した業が現世に現われたのであり、臨終の時に邪見を伴うようになっている。

この *Karmavibhaṅgasūtra* の対応經典は

Mahākammavibhaṅgasutta (MN. 136 vol. III pp. 207-215)

「分別大業經」(『中阿含』171經, 大正1・706b-709a)

Upāyikā^③ (Thu 4b⁸-11b²)

を挙げることができるが、その他関連資料として *Abhidharmakośabhāṣya*^④ とその註釈書 *Abhidharmakośavyākhyā*^⑤ とが知られる。ただ、經典名に関して上記の經典はすべて Mahā- が付されているのに対し、この引用經典名は付されていない点に相違が見られる。故に、これらに対応經典と速断することには問題があり、このことは引用文と上記經典との対応個所が一致を見ない点からも言い得る。

今、*Mahākammavibhaṅgasutta* を例にとり、文脈上対応するであろう個所を示す。

tatr' Ānanda…… (中略) ……

pubbe vā 'ssa taṃ kataṃ hoti pāpakammaṃ dukkhavedaniyaṃ, pacchā vā 'ssa taṃ kataṃ hoti pāpakammaṃ dukkhavedaniyaṃ, maraṇakāle vā 'ssa hoti micchādipṭṭhi samattā samādiṇṇā; (MN. vol. III p. 214 ll. 8-11, p. 215 ll. 7-10)

この文は衆生を4種に分類し、その中惡業を離れて来世において惡趣に生じる人、又惡業を行ない来世において惡趣に生じる人を説く個所に記述されているが、引用文が対応するとするならばこの個所以外に考えられない。引用文は大変短い為、対応関係を厳密に論じることとはできないが、文脈上からは類似はしているものの文章構造上引用文の前半部分が異なっているものと言わなければならない。MKV 所引の *Karmavibhaṅgasūtra* は上記經典と全く異なった系統の經典なのか、同系の經典なのかは判断しかねるが、仮に同系との前提に立脚するならば、上記經典等とは異なった伝承、即ち根本有部系の *Upāyikā*, 説一切有部系と言われる「分別大業經」と相違した伝承と考えざるを得ない。尚、Tib 訳 *Karmavibhaṅga* も經典名が不明記の為その名を知ることはでき

ないが、MKV と同一線上において伝承された *Karmavibhaṅgasūtra* を所引している。

[2] *Śrāmaṇyaphalasūtra*

Śrāmaṇyaphalasūtre 'tyayadeśanaṁ kṛtam. pratisaṁdadhātī kuśalamūlāni. tena maraṇakāle cittam prasāditam. asthibhir api Buddhān Bhagavantaṁ śaraṇaṁ gacchāmi. sa upapannamātra eva cyavati.

(pp. 49-50)

これは地獄に墜ちてもすぐに生まれ変わる業を説く段で、それを阿闍世王を例にとり、その因縁談を論じる中で引用される。この引用文は Tib 訳 *Karmavibhaṅga* にも見い出すことができるが、それを以下に示す。

sems myos par byas pa dañ dge sbyoñ gi 'bras bu'i mdo las
sdig bsags te dge ba'i rtsa ba bsags pa dañ tshe 'pho kar rus pa yan cad kyañ
sañs rgyas la skyabs su mchi'o źes gsol ba lta bu ste, de skad du śin tu mi
bzad las rnams byas pa ni bdag la smod dañ rab tu bsags pa dañ sdom par byed
pas de dag srabs 'gyur gyis śin tu rtsa nas phyin ces mi smra'o.

(TTP. vol. 39 119-3-6~7)

(訳) 罪を懺悔して善根を積み、死に際して骨になった後でも仏に帰依すると願う如くであって、そのように非常に恐い業を為す場合、自を戒め、よく懺悔して、そして持戒を為すことによって、これらを少なくするからといっても完全に根本的に無くなったとは言えない。

両者を比較すると、MKV の引用文には Tib 訳 *Karmavibhaṅga* の引用文の後半部分、即ち de skad du śin tu mi bzad las rnams byas pa ni 以下が述べられていないが、前半部分はほぼ合致する。今ここで Tib 訳 *Karmavibhaṅga* に所引されている經典を列挙すると、

Kālikasūtra (Nag po yod pa'i mdo)

Nandikasūtra (señ ge'i skyes ba'i rabs)

Karmavibhaṅgasūtra (尚、先述した如く、これは brgya bsdus pa'i mdo と表記しているに過ぎない)

Śrāmaṇyaphalasūtra (dge sbyoñ gyi 'bras bu'i mdo)

Śyāmākajātaka ((d)kar śam gyi skyes pa'i rabs)

Cakravartisūtra (‘khor lo sgyur ba’i mdo)

であるが、その他に經典名が記されていない引用も若干認められる。これらの引用文は MKV のそれとよく一致しており、このことは MKV と Tib 訳 *Karmavibhaṅga* とが同一經典を依所として引用していることに他ならない。ところで論を元に戻すと、*Śrāmaṇyaphalasūtra* のこの引用文も Tib 訳の後半の部分が、後続するものと推定される。

さて、*Śrāmaṇyaphalasūtra* に関連する資料は次の4点である。

Sāmaññaphalasutta (DN. I pp. 47-86)

『沙門果經』(『長阿含』(27) 大正1・107a ff.)

『仏説寂志果經』(大正1・270c ff.)

『増一阿含』卷39(7) (大正2・762a-764b)

これら4資料と上記の引用文との対応関係は存在しないが、文脈上敢えて対応するであろう個所を挙げるなら *Sāmaññaphalasutta* では第99節の阿闍世王が世尊に懺悔告白する部分がそれに該当する。

So ahaṃ bhante Bhagavantaṃ saraṇaṃ gacchāmi dhammaṃ ca bhikkhu-saṃghaṃ ca, upāsakam maṃ Bhagavatā dhāretu ajjatagge pāpupetaṃ saraṇaṃ gataṃ. (DN. I p. 85 ll. 12-15)

「沙門果經」^⑧では

又白、仏言。我今再三歸_三依仏_一歸_三依法_一。歸_三依僧_一。唯願聽_二我於_一正法中_一為_二優婆塞_一。自今已後_一盡_三形壽_一不殺不盜不姪不欺不飲酒。 (大正1・109c)

とあるが、両者とも引用文と表現を異にしていることが判る。この他の関連資料として『四分律』雜健度に説かれる「沙門果經」に相当する部分^⑨が存在するが、これは *Sāmaññaphalasutta* の第40—98節に一致しているのであり、今問題としている個所は残念ながら見ることができない。又、これに比定される梵文断片も存在する^⑩が、これも第71—81節に対応するのみで、同様に比較し得ない。更に『摩訶僧祇律』にも4回引用されている^⑪が、ここにも該当する個所は存在しない。そして、又、阿闍世王伝説に関する諸文献においてもこの引用文の如き記述表現は見出し得ない。いずれにしても、この引用文はパーリ文献は勿論のこと『長阿含』の「沙門果經」にも『仏説寂志果經』、『増一阿含』

とも全く異なる伝承として位置付けられなければならないであろう。

〔3〕 Śivālakasūtra

〔A〕 yathā ca Śivālakasūtre Bhagavatoktam.

tam evaṃ gr̥hapatiputra mātāpitarau pañcasu sthāneṣu pratyupasthitau
pañcasu sthāneṣu pratiṣṭhāpayataḥ. tasya punar gr̥hapatiputra mātā-
pitṛbhyām anukampitasya puruṣapudgalasya vṛddhir evaṃ pratyāśaṃ-
sitavyā. (p. 56)

この引用文は両親に対して孝養を尽すという段で説れる。これは *Singālovā-
dasuttanta* の一部分に比定することのできる引用文である。MKV には更に
それに比定し得る個所が他に存在している。そこでは経典を引用するといった
表現では示されておらず、話の中に組み込んだ形で説示されている。それを示
すと以下の如くである。

〔B〕 mātāpitarāḥ pañca sthānāni pratyāśaṃsamānāḥ putram icchanti.
saṃvardhito no vṛddhibhūtān pālayiṣyati kāryaṃ ca kariṣyati dravyas-
vāmī ca bhaviṣyati. kālagatānāṃ ca pitṛpiṇḍaṃ dāsyati. kulavaṃśas
ca cirasthitiko bhaviṣyati. imāni pañca sthānāni pratyāśaṃsamānā
mātāpitarāḥ putram icchanti. (p. 59)

尚、經典中における本来の順序は〔B〕〔A〕であろうことは他の関連資料から
判断し得る。〔A〕〔B〕に対応する関連資料は以下の5点である。

Singālovāda-suttanta (DN. III pp. 180-193)

「善生經」(『長阿含』16 大正1・70a-72c)

「善生經」(『中阿含』135 大正1・638c-642a)

『仏説尸迦羅越六方礼經』(大正1・250c-252b)

『仏説善生子經』(大正1・252b-255a)

これより〔A〕〔B〕各々を対応個所と比較することによって、その資料的意味
を考察する。

〔A〕に対応する部分は

Singālovāda-s.

Imehi kho gahapati-putta pañcahi ṭhānehi puttana puratthimā disā mātā-pitaro paccupaṭṭhitā imehi pañcahi ṭhānehi puttam anukampanti. Evam assa esā puratthimā disā paṭicchannā hoti khemā appaṭibhayā. (DN. III p. 189 ll. 14-17)

長阿含「善生經」

善生、夫為_二人子_一。當_レ以_二此五事_一敬_レ順父母_一。父母復以_二五事_一敬_レ視其子_一。……則彼方安穩無_レ有_二憂畏_一。
(大正 1・71c)

中阿含「善生經」

子以_二此五事_一奉_レ敬供_レ養父母_一。……父母亦以_二五事_一善念_二其子_一。居士子、如_レ是東方二俱分別。居士子、聖法律中東方者、謂子父父母也。居士子、若慈_二孝父母_一者必有_二增益_一則無_二衰耗_一。
(大正 1・641a)

『仏説善生子經』

是為東方二分所欲者。得古聖制法。為子必孝。為父母慈愛。士丈夫望益。而善法不衰。
(大正 1・254a)

『仏説尸迦羅越六方礼經』には該当部分は存在しない。尚、両「善生經」中の……は父母が子に対して慈愛する5点が説かれる部分である。比較すると、先ずこれらの經典が東西南北上下の6方中、東方に配せられる父母を礼拝すると説く如く、東方(puratthimā disā)を明示しているのに対し、[A]には全く示されていない点を除くとほぼ文脈上一致する。特に *Sīṅgālovāda-s.* と、又漢訳出上の問題はあろうが、『仏説善生子經』とは子が父母に奉仕し、父母が子を慈愛する各々5点を説いた後で、まとめて述べられるという文章構成上において一致している。但し、*Sīṅgālovāda-s.* を見る限り、言語及び文章表現に大きな隔たりが認められる。

次に[B]は子が父母に対して奉仕するべき5点を説いている部分であるが、この5点を関連資料の対応箇所と関係付けて比較すると次の如くである。尚、()内の数字は説示されている順番を示す。

(1) saṁvardhito no vṛddhībhūtān pālayiṣyati
Sīṅgālovāda-s. : (1) bhato nesaṁ bharissāmi

(2) kāryaṁ ca kariṣyati
Sīṅgālovāda-s. : (2) kiccaṁ nesaṁ karissāmi

長阿含「善生經」: (2) 凡有_二所為_一先白_二父母_一

中阿含「善生經」: (2) 備_二辦衆事_一

- 『善生子經』 : (2) 唯修責負
 (3) *dravyasvāmi ca bhaviṣyati*
Sīṅgālovāda-s. : (4) *dāyajjam paṭipajjāmi*
 長阿含「善生經」: (1) 供奉能使、無、乏
 中阿含「善生經」: (1) 増=益財物—
 (4) *kālagatānāṃ ca piṭṭipīḍaṃ dāsyati*
Sīṅgālovāda-s. : (5) *petānaṃ kālakatānaṃ dakkhiṇaṃ anuppadassāmi*
 中阿含「善生經」: (5) 所有私物尽以奉上
 『善生子經』 : (4) 唯從供養
 (5) *kulavaṃśas ca cirasthitiko bhaviṣyati*
Sīṅgālovāda-s. : (3) *kulavaṃsaṃ ṭhapessāmi*
 長阿含「善生經」: (5) 不、断=父母所為正業—

以上は〔B〕の5点にほぼ対応するであろう個所を挙げたが、この中 *Sīṅgālovāda-s.* の(3)は果して対応するかは疑問が残る。長阿含「善生經」(3)父母所為恭順不、逆(4)父母正令不、敢違背—、中阿含「善生經」(3)所欲則奉(4)自恣不、違、『仏説善生子經』(1)念思惟報家事 (3)唯解勅戒 (5)唯歛父母は〔B〕と対応しないか、或いは決定し難いものである。『仏説尸迦羅越六方礼經』は訳出上に種々の問題点があろうが、全く異なったら5点であるとしか理解できない程相違している。いずれにしても、*Śivālakasūtra* は〔B〕を見る限り、他の関連資料とは異なった伝承上に定立されるべき性格を有していることが判るが、しかし一連の文献と同種の經典であることに間違いのないことも事実である。

さて、ここで更に一つの関連文献を見い出すことができる。それはトルファン出土の *Śikhālakasūtra*²⁶ である。この写本は完全ではない為、その全容を知ることとはできないが、〔A〕〔B〕に対応する部分 Kat.-Nr. 412 (26-27) を以下に示す。

26 (Lü 11)

R

- 1 +++++ (grha)[pa]tip(u)tra diś[aḥ] +++++ .. ///
 2 +++++ (mātāpi)tarau draṣṭavyam tena putr(e)ṇa māt(ā) + ///
 3 ++ (pariharta)vyam ka ○ tamai paṃcabhiḥ sammāna + ///
 4 +++++ .. ca paṃcam[am] pa ○ da[m bh]avati | t[e]na putreṇa ///

5 +++++ [ri]hṛtam māt[āp](i)[ta]ram=api tam putra(m) paṃcabhiḥ
sthā[n]ai ///

6 +++++ n=āpy=aavaram=asya bhavati | a[tr]. + [m]e .. +++++ ///

27 (Lü 12)

V

1 ++++++ ſ. yati | eva ++++++ [p]rat(i)c[cha]nnā
[bha](va)[t](i) | pū(r)[v](ā) [kha]lu dig āry(e) dha(rmavinaye) +

2 ++++++ vaṃ mātāpitṛ ka[l]. +++ .. ++++++ pitasya
pudgalasya vṛddhi[r]=eva pratikāṃ[kṣ]itavyā [ku](śālānāṃ)

3 ++++++ (yathā kha)[lu] da ○ kṣiṇā dig=evaṃ ant(evāsinā) [ā]cāryo
draṣṭavyaḥ ten=ānte[vā]sinā ā[cā]ryaḥ paṃcabhiḥ sthā(naiḥ) +

4-6 (略)

(pp. 55-57)

見て判る様に半分近くが欠損した写本であるので厳密には比較できないが、先
ず[A]との対応部分を見ると、V-2 に mātāpitṛ ka[l]+++ .. ++++++
pitasya pudgalasya vṛddhi[r] eva pratikāṃ[kṣ]itavyā とあり、これは [A]
の anukampitasya puruṣapudgalasya vṛddhir evam pratyāśamsitavyā とほ
ぼ一致する。この部分は mātāpitṛ(bhyām) kal(yāṇāmanasā pratyānukāṃ)-
pitasya pudgalasya vṛddhir eva pratikāṃkṣitavyā と復元^②されており、両者
を見ると、pudgalasya と puruṣapudgalasya, prati/kāṅkṣ と prati/śams の
差異の他、kalyāṇāmanasā の有無といった相違が認められる。しかし、この
相違は *Siṅgālovāda-s.* の場合と比べて僅小である。[B] の対応部分に関して
は R の右側が欠損していることにより大半が欠落している為、定かではない
が、R-4 前後が該当個所であろう。しかし、語字数から判断して R-4 前後の
どれかの語句に対応すべきであろうが、そうでないところを見ると差異の存在
が示されているものと見ることもできるかも知れない。

ところで、これら一連の經典の原題名は *Siṅgālovādasuttanta* として一般
的であったが、ここで新たに *Śivālakasūtra* と *Śikhālakasūtra* なる題名の存
在を知った。そこで、今少しこの問題に触れてみたい。*Siṅgālovāda* は写本に
よって *Siṅgāla*、或いは *Sigāla* となっていること、註釈書のすべての写本に

は ovāda が省かれ、^⑤そして *Siṅgālovāda-s.* の註釈書名が *Sigālakasutta-vaṇṇanā* となっていることを考える時、語形上、Siṅgālovāda と Śīvalaka, Śikhāla の隔たりが解消されるようである。即ち、Sigāla, Śīvalaka, Śikhāla といった語形上ほぼ同形の題名が並列することになる。この中、Sigāla と Śīvalaka とは g と v の語の変換が言語的に可能であることからすれば、両者は同形になる可能性が存在する。一方、kh は g, v と変換は無理のようであるので、Śikhāla は如何に理解すべきか決断し難い。ここで、この經典の原題名について考察することは本論の目的ではないので差し控えるが、「善生」の原語は何であるかについては興味深い。これに関しても決定し難いが、3様の題名に限って選択が許されるならば、語義上により Śīvalaka がより適切ではないかと想定し得るであろう。

以上、*Śīvalakasūtra* の一部を他の関連資料と比較したが、それはいずれとも多少を含めて相違していることから、それらとは異なった伝承上に定置されると考えて良いであろう。

[4] *Dakṣiṇāvibhaṅgasūtra*

yathāha *Bhagavān Dakṣiṇāvibhaṅgasūtre.*

yathānanda pudgalaḥ pudgalaḥ āgama Buddhaṁ saraṇaṁ gacchati
dharmaṁ saṁghaṁ saraṇaṁ gacchati yathoktāni ca śikṣāpadāni vak-
tavyāni, tenānanda pudgaleṇa tasya pudgalaśya na śakyam pratikartum.
yad idam abhivādanapratyutthānamātreṇa (p. 61)

この文は父母と子の関係は弟子と阿闍梨・和尚と同様であると説く段において引用される。*Dakṣiṇāvibhaṅgasūtra* の関連資料は次の3点である。

Dakṣiṇāvibhaṅgasutta (MN. III pp. 253-257)

「瞿曇弥経」(『中阿含』180 大正1・721c-723a)

『仏説分別布施経』(大正1・903b-904b)

今、この引用文との各々の対応箇所を示すと、

Dakṣiṇāvibhaṅga-s. は

Yaṁ h', Ānanda, puggalo puggalaṁ āgama Buddhaṁ saraṇaṁ gato hoti,

dhammaṃ saraṇaṃ gato hoti, saṃghaṃ saraṇaṃ gato hoti, imass' Ānanda, puggalassa iminā puggalena na suppatikāraṃ vadāmi yadidaṃ abhivādana-paccupaṭṭhānañjalikammaṃ sāmīcikkammaṃ cīvarapiṇḍapātasenāsanagilāna-paccayabhesajjaparikkhārānuppādānena. (p. 254)

「瞿曇弥經」は

阿難。若有_レ人因_レ人故得_二自歸_一於_二仏法及比丘衆_一。不_レ疑_二三尊苦習滅道_一。成_二就信戒多聞施慧_一。離_レ殺斷_二殺不与取邪婬妄言_一離_レ酒斷_レ酒者。此人供_二養於彼人_一至_二盡形壽_一。以_二飲食衣被床榻湯藥及若干種諸生活具_一不_レ得_二報恩_一。(722a)

『仏説分別布施經』は

阿難当知。所有補特伽羅能起淨信心。歸依仏法僧者甚為難事。又復能持不殺不盜不婬不妄不飲酒等近事戒法。如是補特伽羅轉復難作。何況於仏世尊。合掌恭敬而行布施。施已淨信於仏無疑。及法僧伽亦無疑惑。(903c)

であるが、これらを比較すると、この引用文は上記の箇所と文脈上ほぼ対応していることが判るが、しかし差異も存在する。特に *abhivādanapratyutthānamātreṇa* の部分が他經と異なる。例えば、*Dakḥiṇāvibhaṅga-s.* での *sāmīcikkammaṃ* 以下の種々の施与 (*anuppadāna*) が存在しない。他方、漢訳 2 訳とその引用文にある戒 (*śikṣāpāda*) の記述は *Dakḥiṇāvibhaṅga-s.* には見られない。この様に、これらは三者三様の如く各々多少の差異が認められる^⑧。

[5] Rājokīrṇaka

Śatavarge āgame Prasenaḥjitsaṃyuktesu Rājopakīrṇakaṃ nāma sūtram.
..... (中略)

dhanam dhānyam jātarūpaṃ gavāśvamaṇikuṇḍalam
dāsakarmakarā bhṛtyā ye cānye anujīvinah
mriyamāṇasya nānveti nāpi ādāya gacchati.
yat tena kṛtam bhavati kalyāṇam atha pāpakam
tad dhi tasya svakam bhavati tac ca ādāya gacchati.
tasmāt kuruta puṇyānām nicayaṃ sāmparāyikam
puṇyāni paraloke 'smin pratiṣṭhā prāṇinām smṛtā
grhe tiṣṭhati kāyo 'yaṃ śmaśāne priya bāndhavāḥ

sukṛtaṃ duṣkṛtaṃ caiva gacchantam anugacchati. (pp.70-71)

これは裕福ではあるが慳吝になる業とは何であるかを説く段で、その例として引用される。散文（中略の部分）部分は原典をそのまま引用しているというより筋立てを失なわない程度にその一部を抄出しているか、或いは取意したものとの疑問も残るので、ここでは偈文のみを取り上げ、他の関連資料と比較を試みる。この經典の関連資料は次の3点である。

Aputtaka (SN. III 2・10 pp.91-93)

『雜阿含』1233經（大正2・337b-338a）

『別訳雜阿含』60經（大正2・394a-c）

今、ここで Aputtaka と『雜阿含』の偈文を示す。

Dhaññaṃ dhanam rajataṃ jātarūpaṃ
pariggahaṃ vā pi yad atthi kiñci
dāsā kammakarā pessaṃ ye c-assa anugivino
sabbaṃ nādāya gantabbaṃ sabbaṃ nikkhippagāminam
yañ ca karoti kāyena vācāya uda cetasā
taṃ hi tassa sakaṃ hoti tañca ādāya gacchati
tañc-assa anugaṃ hoti chāyā va anapāyini
tasmā kareyya kalyāṇam nicayaṃ samparāyikaṃ
puññaṃ paralokasmin patiṭṭhā honti pāṇinan (p. 93)

時波斯匿王念、彼悲泣。以衣拭淚而說偈言

財物真金寶	象馬莊嚴具	奴僕諸僮使	及諸田宅等
一切皆遺棄	裸神獨遊往	福運數已窮	永捨於人身
彼今何所有	何所持而去	於何事不捨	如影之隨形

爾時世尊說偈答言

唯有罪福業	若人已作者	是則己之有	彼則常持去
生死未曾捨	如影之隨形	如人少資糧	涉遠遭苦難
不修功德者	必經惡道苦	如人豐資糧	安樂以遠遊
修德淳厚者	善趣長受樂	如人遠遊行	歲久安隱歸
宗親善知識	歡樂欣集會	善修功德者	此沒生他世
彼諸親眷屬	見則心歡喜	是故當修福	積集期永久
福德能為人	建立他世樂	福德天所歎	等修正行故
現世人不毀	終則生天上		(337c-338a)

『雜阿含』の偈は前半が波斯匿王の説いた偈で後半が世尊の答え説いた偈と前後半に2分されているのに対し、この引用文とパーリ文は偈すべてが世尊の説示としている点が顕著な相違である。前半部では『雜阿含』とパーリ文が一致しているのに対し、この引用文はパーリ文 *tañc-assa anugaṃ hoti chāyā va anapāyini* に該当する部分は存在しない。又、後半部分では『雜阿含』はこの引用文とパーリ文に比べてその内容は相当増広されているようであり、大きな差異が見られ、更に MKV 所引のこの偈文の最後の2行はパーリ文にも『雜阿含』に見られないことが知れる。以上に見られる偈文のこのような差異は三者各々の伝承の相違を端的に明示したものと解してよい。この引用文の直前にはこの經典中に説かれる因縁談が取意され説明されているが、そこでこの物語の主人公名が Hillisāla となっており、この点でも『雜阿含』での摩訶男、パーリ文での単なる普通名詞 *seṭṭhi-gahapati* と相違する。しかし、この Hillisāla なる名前は他の仏典からも定かではない^⑧。この引用偈文を韻律上より考察する時、最初3行は変則6句、それ以後は4句の *śloka* と見做せるが、一方で若干崩れた *mātrāsamaka* とも解せる。パーリ偈文は最初の2行は *triṣṭubh* であり、それ以後は *śloka* 形を呈しているが、両者とも一定の韻律では解釈できない特異形を有している。

ところで、引用に際して *Śatavarge Āgame* と記述されているが、これはかつて存在したと考える梵文經典 *Samyukta-āgama* を意味するのではないかと推定される^⑨が、この用例は先述した *Karmavibhaṅgasūtra* にも見られ、Tib 訳 *Karmavibhaṅga* にもそこで *brgya bsdus pa'i mdo* と記されていることを考え合わせ時、この *Śatavarge āgame* は単に *Samyukta-āgama* を意味するものとは考えられない。むしろ、これらを伝承する部派が有していた未知の聖典を指示しているもの^⑩と考える方が妥当であろう。

4

ここでは、經典名が不明記で引用されている例を若干取り上げ考察する。

[1] 外国で報いを受ける業とは何であるのかという段で、その因縁談として

取り上げられる。この場合は他例が *sūtre* との表記で引用されるに対し、*yathā Bhagavān kathayati* とされ、異なっている。この原文は非常に長文に及び、ここでは記載ができない点、そして、それが原典からの引用なのか取意なのか定かでない点より、その筋立を中心にした関連資料との比較によって、その特徴を挙げるのに止める。関連資料を示すと以下の如くである。

Valāhassajāṭaka (J. 196 II pp127-130)

Catuvvārajāṭaka (J. 439 IV pp. 1-6)

「商人求財経」(『中阿含』136 大正1・642a-645b)

この経典が如何なる内容を有しているか示さなければならないが、「商人求財経」の筋の大略を示すことにより、それとの比較によって明かにしたい。干潟博士が巧みにその大略を示されている^⑧ので、ここではそれを用いることにする。

- 1 昔多くの商人の一団が財宝を求めて船で大海に出た。
- 2 大海中摩竭魚の為に破船し一島(それは羅刹鬼女の島)に漂着した。
- 3 その海浜に多くの美女(実は羅刹鬼女)出で、誘惑し各々その家居に連れて行き、そこで悦楽合会して児を生んだ。
- 4 ただ彼女らが家に行く途中云った言葉の中に、「この島の南の方へは決して行くな」ということがあった。
- 5 一人の知恵ある商人、その言葉を思い出していぶかり、一夜ひそかに南行して行くほどに、衆人の啼哭叫喚の声を聞いた。彼れ進み見るにそこには一大鉄城があって、声はそこからのものであった。
- 6 その知恵人は城壁の大樹に上り、城内を見るに、啼哭していた衆人の曰、「自分等は商人で宝を求めに海に出て、破船してこの島に着いた。美人共の誘惑のままに共に住み児を生んだが、然し他の破船漂着者が来たならば、それらを引入れ新夫として自分達を此城中に入れておいて喰うのである、既に250人は喰われてしまった、彼女等は皆羅刹鬼女であるぞ」と。
- 7 その知恵人曰く「これより逃れる方法なきや」と、彼等教えて曰く「我等嘗て天の声を聞いた。即ち「月15日夜、駝馬王が現われ、「彼岸に渡ろうと欲する者あらば我れ安穩に渡そう」と再三唱えられた。汝等もこの駝馬の声を聞いたならば直ちに出で行き救いを求められよ」と。
- 8 後に月15日夜、果せる哉一駝馬王来り呼んだ。彼等は馬王に乞うた。馬王曰く「我汝等を救わん。但し、かの婦人等は児を抱き来り汝等に留まれというであろう。汝等もし彼等婦人児女に心ひかれたならば、我が背中に乗って居ても落ちて鬼女等の食と

ならん。もし心引かれぬならば、我が一毛を持って居ても必ず彼岸に達し得るであらう」。

9 その通りになった。

MKV の文は上記と大筋においてほぼ一致するが興味深い種々の相違も呈している。その点は1について *Maitrāyājña* という裕福な息子が母親の反対にも拘らず、母親の頭を蹴って大海に出た点で、これは *Catudvāra-j.* も同じである。その航海の無事を願って人斎戒を守り、布薩を行なった点、2について、暴風によって破船した点、3について、子をもうけた話は出てこない点、4について、北の方へ行行ってはならないという点、6について、衆人の言は *Maitrāyājña* が行なってきた行為と全く同様のことを告白し、更に母親の頭を蹴ったことで苦しみを受けていると告白する点であり、羅刹鬼女によって人が喰われるという話はない点。7以下は「商人求財經」と全く興味深い相違を呈している。その続きの大筋を示すと、彼は地獄の衆人と同じ報いを受けるのではないかと怖れ、両親に祈りを捧げ、如何なる境遇に生まれようと両親に従う、との誓願を立て、そして又、如何なる人が地獄に堕ちようともその人の為に地獄に留まる、との誓願を立てる。すると、先の衆人の如き苦痛を受けなくてすんだ。このことは実は常に息子の無事を祈る母親の願いからである、と。

以上、MKV 所引のこの經典と「商人求財經」との大凡の相違を見たが、*Valāhassa-j.* *Catudvāra-j.* とも異なっており、これら3種の関連資料各々も差異が認められる。特に注意すべきは、「商人求財經」、*Valāhassa-j.* は馬頭観音思想に関する前段階的資料と位置付けられている^⑨が、その經典の結末が馬王の救済であるのに対し、この經典は自己の誓願と母親の子を思う願いが結末となっている点にある。この經典は先述した如く、外国で報いを受ける業の因縁談として引用されているのであり、この結末が主題となっていないことを考える時、同じ筋立てを有しながら異なった意味付けをもつこの經典は3種の関連資料と全く異なった伝承と考えることが妥当のようである。

[2]

yathā ca Bhagavatā sūtra uktam.

[A]① Yato bhikṣavaḥ kuśalaśīlavanto brahmacārīnaḥ kalyāṇadharmā-
ṇaḥ pravrajitā upasaṃkramanti pañca tasmin kule 'nuśaṃsāḥ
pratyanuśaṃsitavyāḥ. katame pañca.

② iha bhikṣavaḥ upasaṃkrānteṣu śīlavatsu cittāni prasādayanti
svargasaṃvartaniyaṃ tad bhikṣavaḥ kulam tasmin samaye prati-
padam pratipannam bhavati.

③ punar aparam bhikṣavaḥ upasaṃkrānteṣu śīlavatsu abhivādayanti
pratyuṭtiṣṭhanti. uccakulasamvartaniyam bhikṣavaḥ. tasmin samaye
pratipadam pratipannam bhavati. (pp. 40-41)

(訳) 比丘達よ、善戒をもち、梵行を行じ、正しい教えを有する出家者が近づく家には5種の称讃されるべき福利がある。この5つとは何であるか。この世で比丘達よ、出家者が近づく時、その心が淨信であるならばその時比丘達よ、その家族は天に生まれる道を歩めるのである。又次に比丘達よ、出家者が近づく時、礼拝し迎えるならば、その時比丘達よ、その家族は高貴な家柄に生れる道を歩めるのである。

これと同じ經典は更に、大きな福利をもたらす業とは何であるかを説く段でも引用される。

[B]⑤ punar aparam bhikṣavaḥ upasaṃkrānteṣu śīlavatsu dānāni
dadanti puṇyāni ca kurvanti. mahābhogasaṃvartaniyaṃ bhikṣavas
tat kulam tasmin samaye pratipadam pratipannam bhavati. (p. 41)

(訳) 又次に、比丘達よ、出家者が近づく時、施しを与え、功德を行なうなら、その時比丘達よ、その家族は大きな福利を得る道を歩めるのである。

この引用文は Tib 訳 *Karmavibhaṅga* でも MKV と同様、經典名不明記で、そして [A] [B] 各々の該当部分が全く同じ段に所引されており、その内容も全く一致している。この引用文の関連資料は漢訳經典にはなく、唯一、AN. 199 經 (AN. III pp. 244-5) と平行經関係が有るのみである。今、その全文を示すと以下の如くである。

(1) Yasmiṃ bhikkhave samaye śīlavanto pabbajitā kulam upasaṃkamanti, tattha manussā pañcahi ṭhānehi bahum puññaṃ pasavanti. Katamehi pañcahi?

(2) Yasmiṃ bhikkhave samaye śīlavante pabbajite kulam upasaṃkamante manussā

disvā cittāni pasādenti, saggasaṃvattanikaṃ bhikkhave taṃ kulaṃ tasmīṃ samaye paṭipadaṃ paṭipannaṃ hoti.

- (3) Yasmīṃ bhikkhave samaye silavante pabbajite kulaṃ upasaṅkamante manussā paccuṭṭhenti abhivādenti āsanaṃ denti, uccākulinasaṃvattanikaṃ bhikkhave taṃ kulaṃ tasmīṃ samaye paṭipadaṃ paṭipannaṃ hoti.
- (4) Yasmīṃ bhikkhave samaye silavante pabbajite kulaṃ upasaṅkamante manussā maccheramalaṃ paṭivinodenti, mahesakkhasaṃvattanikaṃ bhikkhave taṃ kulaṃ tasmīṃ samaye paṭipadaṃ paṭipannaṃ hoti.
- (5) Yasmīṃ bhikkhave samaye silavante pabbajite kulaṃ upasaṅkamante manussā yathāsattip yathābalaṃ saṃvibhajanti, mahābhogasaṃvattanikaṃ bhikkhave taṃ kulaṃ tasmīṃ samaye paṭipadaṃ paṭipannaṃ hoti.
- (6) Yasmīṃ bhikkhave samaye silavante pabbajite kulaṃ upasaṅkamante manussā paripucchanti paripaṇhanti dhammaṃ suṇanti mahāpaṇṇāsaṃvattanikaṃ bhikkhave taṃ kulaṃ tasmīṃ samaye paṭipadaṃ paṭipannaṃ hoti.

Yasmīṃ bhikkhave samaye silavanto pabbajitā kulaṃ upasaṅkamanti, tattha manussā imehi pañcahi ṭhānehi bahūṃ puññaṃ pasavanti ti.

両者の対応関係は[A]とパーリ文の(1)(2)(3), [B]と(5)とであり、各々ほぼ一致する関係にあるが、多少の差異は認められる。特に(1)(5)との差異は大きく、その他、(2)(3)(5)各々の前半部分も文章構成上全く相違している。

ところで、[A]の直後に「このように經典すべてが用いられるべきである」(evaṃ sarvasūtraṃ yojyam) と説示されていること、及び平行經である AN. 199 經は 5 集 (pañca-nipāta) に属し、5 種の項目を論じた經典であることを考え合わせ時、この MKV のこの經典もパーリ文の(4)(6)に相当する部分を有し、それを以って全体としていたものと推定される。いずれにしても、この引用文は MKV 所引の經典の中でパーリ文献に平行經があり、漢訳文献には存在しない唯一の例である。

5

MKV に所引される經典等を中心にその関連資料との比較に基づき、それら經典の伝承上における意味を考察してきたが、更に、特に相違し注意を要する個所については、その部分的パラレルを様々な文献より調査し、成立史上から

考察する必要がある。しかし、本論は MKV の部派所属の問題を論究することが主目的であった為、主たる関連資料との比較で充足されるとの立場であることを、先ずここで断わっておかねばならない。

さて、本論で取り上げた MKV 所引經典は4種の『中阿含』、2種の『長阿含』、1種の『雜阿含』、『増一阿含』と相当の差異が存在し、中には対応經典であろうにも拘らず、パラレルが存在しない場合も見られ、これらとは全く別の伝承と解すべきことが判明した。このことは説一切有部系、法蔵部系、大衆部系、根本有部系所伝の否定に他ならないが、特に4種の『中阿含』との相違は決定的とも思える意味をもち、C.B. Tripāṭhi の説^①とを考え合わす時、それは確実なものとなろう。尚、『増一阿含』、『雜阿含』を関連資料とした MKV 所引經典は1種だけなので、これとの関係は不確定である。所引されている律について眺めると、化地部の律が引かれているが、そこでそれを異なった部派と規定していることから、化地部所属が否定されることは明白であり、又、2回に亘る出典不明記の律の引用も、これを MKV 所属の律との前提に立脚すれば、『摩訶僧祇律』即ち大衆部系所属も否定されることになる。しかし、これには不確定要素も多分に含んでおり決定的とはいえない。現存資料とほとんど異なっているということ、及び MKV には本論で考察した經典の他に関連資料が見い出せないものも多く存在していることを考え合わすと、現存資料における伝承とは異なった系統にあることを示唆、即ち、そのことは消極的ではあるが、部派を想定する一つの根拠になり得るかも知れない。具体的に言えば、律を有していたと考えられる飲光部、正量部等を想定し得る可能性も無視はできない。一方で、相違を成立史的理解によって解消するという可能性も残るが、これは困難を極めるであろう。いずれにしても、MKV 所引經典は化地部と説一切有部系のものではないことだけは言い得るであろう。

註

- ① Sylvain Lévi: *Mahākarmavibhaṅga et Karmavibhaṅgopadeśa* 1932。尚、山田龍城『梵語仏典の諸文献』pp.39-41、同「鸚鵡經」『文化』2—3 pp.339-349、に

これら一連の經典群の紹介と研究がなされている。又訳・註に関しては岩本裕『初期經典』仏教聖典選第一卷 pp. 257-335, 389-406 参照。

- ② 仏訳は L. Feer: *Fragments traduits du Kandjour, Annales du Musée Guimet* Tome 5 pp. 250-279 尚, 山田龍城氏はそれを Tib 訳 *Karmavibhaṅga* の訳としているが、誤まりである。 *op. cit.*, p. 41.
- ③ MKV は80種, Tib 訳 *Karmavibhaṅga* は101種, 同訳 *Karmavibhaṅga nāma dharmagrantha* は84種, 漢訳『仏為首迦長者業報差別經』は75種, 同訳『分別善惡報應經』は104種と各々分類されている。
- ④ MKV と *Karmavibhaṅgapadeśa* の所引經典等は S. Lévi *op. cit.* introduction pp. 10-11 にまとめてある。
- ⑤ 拙稿「Cakravartīsūtra について」『印仏研』32-2, 参照。
- ⑥ 榎本文雄「『雜阿含』 Devatāsamyukta と Devatāsūtra の展開」『印仏研』31-1 pp. (88)-(90) 参照。関連して, 松村恒「Devatāsūtra と Alpadevatāsūtra」『印仏研』30-2 pp. (54)-(60)
- ⑦ TTP. vol. 39 121-3-3~4, Lévi p. 198
 dper na bcom ldan 'das kyis 'dul ba las gsuñs pa.
 mkhan po ni slob ma la bu'i 'du śes 'jog go. slob ma ni mkhan po la pha'i
 'du śes 'jog go. de bzin du phan tshun pha ma dan bu'i 'du śes 'jog go źes
 gsuñs pa lta bu ste.
- ⑧ 大正22・624c ff.
- ⑨ 大正22・29b ff.
- ⑩ 大正23・55c ff.
- ⑪ 大正22・320c ff.
- ⑫ 大正 23・746b ff.
- ⑬ 本庄良文「シャマタデーヴァの傳へる「大業分別經」と「法施比丘尼經」」『佛教文化研究』28 pp. 95-105 参照。同「シャマタデーヴァの俱舍論註一隨眠品一」『南都佛教』49 pp. 23-4.
- ⑭ Pradhan: p. 281 l. 11 ff.
- ⑮ Wogiwara: p. 447 l. 26 ff.
- ⑯ その他, 『成実論』に「分別大業經」の引用文が存在する。大正32・298 a.
- ⑰ *Upāyikā*, 「分別大業經」も文脈上同じ。尚, *Upāyikā* に関して本庄良文 *op. cit.* p. 104 参照。
- ⑱ 『仏説寂志果經』, 『増一阿含』もほぼ同じ。大正1・276a, 大正2・764 a.
- ⑲ 大正22・962b ff.
- ⑳ P. V. Bapat: Another valuable collection of Buddhist Sanskrit manuscripts containing among others The Śrāmaṇya-phala Sūtra in Sanskrit, *Annals of the*

Bhandarkar Oriental Research Institute vol. XXX pp. 241-249 参照。

- ㉑ 大正22・294a, 270a, 447c, 482a. これに関しては、平川彰『律蔵の研究』pp. 773-4 参照。
- ㉒ 異本に『仏説尸迦羅越六向拜経』が存在する。北京図書館蔵敦煌文書 No. 6637。これに関して、香川孝雄「敦煌本 尸迦羅越六向拜経について」『佛教大学研究紀要』59 pp. 1-14 参照。
- ㉓ L. Sander, E. Waldschmidt: *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden* Teil IV pp. 47-64. この資料は榎本文雄氏に教示を受けた。ここで謝意を記す。
- ㉔ *ibid.* p. 57 note 12 参照。
- ㉕ *Sumaṅgalavilāsini* vol. III p. 941 note 参照。
- ㉖ R. Pischel: *A Grammar of the Prākṛit Languages* §231 p. 194 参照。
- ㉗ トルファン出土の梵文断片に比定される部分が存在するが、不確定である。E. Waldschmidt: *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden* Teil III pp. 241-2.
- ㉘ 岩本 *op. cit.* p. 401 註12。
- ㉙ *ibid.* 註12。
- ㉚ 現存資料から百が付される聖典として『摩訶僧祇律』に増一阿含が百増と挙げられるが、これとも異なったものであろう。(大正22・491c)
- ㉛ Lévi *op. cit.* p. 50 l. 14-p. 55 l. 16.
- ㉜ 干潟龍祥『本生経類の思想史的研究』pp. 173-4 参照。
- ㉝ 以下は Lévi *op. cit.* p. 54 l. 15 ff.
- ㉞ 干潟 *op. cit.* pp. 145-151 参照。
- ㉟ [A] は TTP. vol. 39 118-1-5~8

dper na bcom ldan 'das kyis mdo las gsuñs pa
dge sloñ dag groñ gañ du rab tu byuñ ba tshul khirms dañ ldan bžin
tshañs par spyod pa. dge ba'i chos can rnams 'oñ ba'i groñ der legs pa
lña 'byuñ bar rig par bya ste lña gañ že na. de ni tshul khirms dañ ldan
pa 'oñs ba rnams la sems dañ bar 'gyur ro. dge sloñ dag gžan yañ de'i
tshe. rigs de mtho ris su skye ba'i lam du žugs pa yin no. dge sloñ dag
gžan yañ tshul khirms dañ ldan pa dag 'oñs na gus par smra ba dañ bsu
ba'i las byed de. de'i tshe rigs de dag rigs mtho bar 'gyur ba'i lam du
žugs pa yin no žes gsuñs pa lta bu ste.

[B] は *ibid.* 118-2-5~6

mdo de ñid las
dge sloñ dag gžan yañ tshul khirms dañ ldan pa rnams 'oñs pa dag la
sbyin pa byed ciñ. bsod nams byed pa'i rigs de dag de'i tshe loñs spyod
che bar 'gyur ba'i lam du žugs pa yin no žes gsuñs pa lta bu ste.

- ㊦ Karmavibhaṅgopadeśa und Berliner Texte, WZKSO. 10 pp. 208-219 参照。